



どうして生き続けなければならないの？

住 職

新聞の人生相談の欄に「生きる意味とは」というのが載っていました。

「五十代の女性。小学生の頃から頭にある問い、『生きていることの意味』がどうしても見出せません。

本を読みあさり、人の話を聞き、人間はこの世だけに生きているのではないと考えるようになりましたが、いつも前向きではられません。今はもう、お迎えが来てもいいような気持ちになったりもします。思い残すことなどないように思えるからです。悩みがないからかもしれません。

幼い頃から親の離婚や夫の失業など二度と味わいたくない経験もしました。それでも家族を思っ生きてきた自分が、今はなにやら腹立たしく思えたりします。その経験が、今の平穏な暮らしにつながっているのだとわかつてはいますが・・・。今ある幸せに感謝しながら、時々むなしくてた

まらなくなりません。生きていく信条のようなものは、どうしたら見つけられるのでしょうか。」

この問いに対して、

「生きることの意味はあらかじめあるものではありません。問うなかで探し当て、紡（つむ）いでゆくものです。思い残すことはない、そんな心境にもなっているとあなたは言う。ならば、これからはあなたも無名のまま人を支える側に回ってみてはいかがですか？」と、答えておられました。これで相談者の悩みが解けるだろうか？

人生には、悩みはつきものです。生活する上での悩みと、老・病・死からのがれることのできない「自分自身のいのち」の悩みがあります。お釈迦様は、生活する上ではなに不自由のない王子様の生活をされていました。「いのちの悩み」から、これを捨てて自分にふさわしい生き方を求められ、ついに仏の悟りを開かれました。それによって、私たちに「この世をどう生きていたらよいのか」を明らかにお示しくだされたのです。

家族や仕事や財産などでは埋めつくすことので

きない悩みを、心の奥底に人間はかかえて生きています。気づくか気づかないか、それは別ですが、自分自身の「いのちへの問い」です。相談者の問いは、このことに関するもののように思います。「私は何を目標に生きていたらよいのか」ということです。仏の心がその人の心の中に顕れかけたと言えるでしょう。

私達が道を行く時、どちらの道を行ったらいいのかわからないのを「道に迷う」と言います。同じように、生きていく方向が分からないのは「人生における迷い」です。しかし、「迷い」は正しい目標があつてのことです。目標を持たないと「迷った」とは気づきません。私たちは死んでいく「いのち」を持って、この世に何をしに来たのでしょうか。

「この世は、自分を探しに来たところ・・・居たか、居たかこの世は、自分を見に来たところ」と陶芸家の河合寛治郎さんは言っていました。

私たちは、お念仏をいただきお浄土に生まれ仏に成るため生きています。」と親鸞聖人はおしめしてくださいました。

旧跡参拝旅行

中川 さなみ

七月二日～三日、旧跡参拝旅行に参加しました。今年はお親鸞聖人が関東から帰路途中に立ち寄りた三河方面を訪ねました。

「願照寺」は聖人の直弟子、専信房専海法師の開かれたお寺で、「安静の御影」を所蔵されています。次の参拝は「妙源寺」、領主が城内の太子堂で聖人にお説法を願い出て本願念仏の、み教えを聴聞し、深く帰依の心が生じて念仏者となり、お寺を建立されました。

今回の参拝で特に印象深かった「応仁寺」は応仁二年に蓮如上人が来られたのでお寺の名前になったそうです。

本願寺弾圧の激しい頃、蓮如上人は三河の地で教化をすすめられました。拠点とされた「西端道場」をわずか数か月で去られる時、「縁があったらまたまいります」と去られて以来五百数年、村人は住職

(蓮如上人)を待ちながら交代で寺を守られました。現在も町内で世話役を決めて管理されておられます。

驚くことに選ばれたお世話役さんの中にはクリスチャン、他宗派の方もおられるとの事でした。

町内の宝物をみんなで守っていると感ずりました。財政も厳しい中、ペットボトルのお茶を私達に一本ずついただき恐縮しました。本当においしかったです。

いつも賑やかな夜の宴会も今年は静かに語り合いながら美味しい夕食をいただきました。

今年も参加できて有難いことでした。

合掌



仏教婦人会 世界へ広まる

坊守

第十五回世界仏教婦人大会が、今年五月三十日、三十一日にカナダのカルガリー市において開催されました。

北米、カナダ、ハワイ、南米そして日本から、千七百人余の人々が一同に集まりました。国や年代の違いを超えて、同じお念仏の道を歩ませていただいている喜びを感じ合い、親睦を深める集いです。

西本願寺の第二十二世門主の夫人籌子さまとご門主の妹九条武子さまが、明治三十七年仏教婦人会を創設されてから百余年をこえ、活動の輪は今や海を渡り国境を越えております。戦時下の辛い厳しい状況の中にあっても、み教えは護り続けられ、日系移民の二世、三世、四世の多くの人々に伝わっております。念仏の尊さを伝え続けてこられたお二人のご苦勞が実を結んだ結果だとありがたく思っています。

5月31日 ホワイト・ハット儀式 世界仏教婦人会連盟総会



「如月の華」を観劇して

―九條武子ものがたり―

空 早苗

「如月の華」は浄土真宗本願寺派第二十一代門主・明如上人の次女として生まれ、九條良致男爵と結婚された九條武子夫人の生涯を描いた劇です。

武子さまは長兄の光瑞夫人、壽子さまとともに仏教婦人会を創設されましたが、壽子さまが若くして逝去された後は武子さまが仏教婦人会本部長として全国を廻り伝道に奔走されました。又、女子教育にも尽力され京都女子大学の基礎を築かれました。

関東大震災では築地本願寺も焼け落ち、ご自身も被災されながら日比谷公園のテントで、寝る間も惜しんで救済活動されたそうです。その後「築地本願寺診療所」、少女厚生施設「六華園」を設立など社会事業にも力を注がれました。

一方、柳原白蓮、与謝野晶子とともに大正三代女流歌人と謳われ、歌集も何冊か出版され、戯曲も書

く才色兼備な武子さま。どこからそのような力が湧いてくるのでしょうか。

幼少のころは壽子さまと木登りをするなど活発な少女、でも生母は側室で使用人の立場なので「ふじ」と呼びずることに疑問を持つなどの聡明さがすでにうかがえています。



仏教婦人会の伝道、女子大学設立、本願寺疑獄事件での心労にも気丈に耐えておられたのですが、敗血症に倒れ、生母、夫、兄の木辺派門主に見守られ、お念仏を唱えながら、またお会いしましょうと、四十二歳の若さで、生涯を閉じられました。二月七日のご命日は「如月忌」といわれております。はかなく散った武子さまに涙が出ました。

第三十三回夏季特別法座

にお参りして

田川 一夫

今回は「いのちに聞く」という題目で住職の法話を聴聞させていただきました。

「われ今さいわいに まことのみのりを聞いて限りなきいのちをたまわり 如來の大悲にいだかれて安らかに日々をおくる」という言葉があります。私はかねてより、この「限りなきいのち」とは一体どういう「いのち」なのか思索していました。

あるご法座で「いのちは、目に見えないが、すべて繋がっている。例えば、地球の海水面の上の島々には、大きいものあり小さいものもあり、形姿は個々バラバラ（これを人間にたとえる）だけれども、水面下の地面はすべて繋がっている。同じように私達の「いのち」はすべて繋がっている。宇宙に万遍なく偏在している。誰もがいのちの奥底では、仏に支えられていて、あなたも私も同じいのちなのです」

と聞かされました。

住職の法座では「親からもらったいのちをどう使うのか。この世を如何に生きるのか。人生で何が一番大事か。いのちは、はたらきのこと。人間が生きているのは、偏にいのちのはたらきがあるからだ」といわれました。「人の生を受くるは難く、やがて死すべきもの」との教えもあります。仏教の命題に「諸行無常、諸法無我」があります。あらゆるものは因と縁が結びついて生じていく。水は縁により湯になったり、氷になったり、雪になったり、雲になり雨になったりします。

人間は、肉体は滅びても生前に造った行為（業）は決して無くなることはなく、縁によって種々に変化する。仏の「いのち」が私の「いのち」となって浄土に往生する。

「必ず助ける」という阿弥陀様の大悲心が伝わった人の「いのち」は私個人の「いのち」であると同時に、私を支え生かし続けている阿弥陀様の「いのち」でもあると理解しています。

カトマンズ本願寺を訪ねて

副住職

今年八月の終わりにネパールのカトマンズを訪ねました。四月には大地震があり現地の復興状況が気にかかっていました。今回初めてカトマンズ本願寺を訪ねました。この辺りは幸いに地震の被害はなかったようです。お寺の中から若い女性のネパール人が出てこられて本堂のなかに案内してくれました。その中の一人はギシン・ウマ・ラマさんと言いました。日本語がとても上手でした。私が本堂で正信偈をお勤めすると、うしろで声を合わせて一緒にお勤めされていました。ここでも、ちゃんと日本と同じように正信偈をお勤めしているんだ、と感激しました。

実は、ウマさんは現在、京都の龍谷大学の学生として浄土真宗を学んでいるだけでなく、得度もさされていてネパール初の女性真宗僧侶だということを知りました。もともと家族はチベット仏教徒で、お寺などを身近に感じていたとのことですが、お坊さんの読むお経や儀式は尊いが遠い存在だったとい

うことです。一方で、真宗はお坊さんと一般の人が平等で参詣者が僧侶と一緒にお経を読むなど開かれた平等な雰囲気です。晴らしいと思ったそうです。

現在、カトマンズ本願寺では地域のネパール人に日本語を教

えています。若い世代の人が通っていますが、日本の文化を紹介する一つとしてお経を皆で読むこともしています。そして浄土真宗の教えに興味を持った日本語教室の生徒が本願寺の信徒になるケースが多いようです。ウマさんはネパールに親鸞聖人の教えが広まるように将来ネパールに浄土真宗の学校をつくるのが夢で、そのためにも今後は大学院に進んでさらに研鑽をつみたいと語ってくださいました。これからの活躍がとても楽しみです。



信行寺行事予定とご案内

◇ 報恩講法要

十二月十九日（土）法話・橘 正信先生

二十日（日）法話・住職

二日間とも午後二時より四時まで
ご都合に合わせて一日でもお参り
下さい。

◇ 新春初法要

平成二十八年一月五日（火）

午後一時より 本堂にて

お正月をお寺で楽しくお迎えしましょう

お勤め、法話の後、みなさんと楽しく
語らいながら、ご馳走を頂きます。

*お世話の方々が手作りのおいしい
料理を持ち寄ってくださいます。

編集後記

八月に行われた夏期特別法座は「いのちに聞く」と言うお題目で「この世をどう生きたらよいのか」また「人生で何が大事なことか」などについて住職がいろんな例をとりあげてお話ししてくださいました。その後十月に、大村智さんがノーベル医学生理学賞を受賞された報道がありました。それは長い研究の末、何億人もの人の命を救う事ができる薬を開発されたと言うことでした。そして「それで得たお金も人の為になることに使わなければならぬ」とその薬を無償でアフリカの人達に提供されておられるそうです。ご本人のお話を聞いてみると、子供の頃「人の為になる事をしなさい」と言っていたおばあさんの言葉が頭に残っていたそうです。

大村さんのように自分が成した事におごることもなく、家族を大切に思い人との縁に感謝し人の為になることをすると言う信条をつらぬき実行されている生き方は、私たちの尊いお手本だ、と感激いたしました。この世にいる限り煩惱からのがれる事が出来ない私達ですが、一つでもできる事からしていけばよいのではないかと思います。

多田 清子